

1. アルツハイマー型認知症者と家族介護者の介護に関する精神的援助について(平成17年度心理科学研究科修士学位論文要旨)

著者名(日)	上田 道子
雑誌名	北海道医療大学心理科学部研究紀要 : J Psychol Sci
巻	1
ページ	109
発行年	2005
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00006776/

平成17年度 心理科学研究科修士学位論文要旨

1. アルツハイマー型認知症者と家族介護者の介護に関する精神的援助について

上田 道子

アルツハイマー型認知症は現在有効な治療法がなく、認知症の進行を遅らせる薬剤として塩酸ドネペジルが使用可能とされている現状である（三村他, 2005）。家族介護者は認知症の症状や介護環境などの介護負担によって抑うつ状態となり、介護保険制度が施行された後においても、家族介護者の抑うつ状態に大きな変化はみられない状況である（鷺尾他, 2002）。先行研究において、介護者の身体的負担感についてはかなり明らかにされているが、精神的負担感については十分に研究されていない。

【目的】要介護者と介護者の介護に関する精神的な負担の要因を明らかにして、介護負担の軽減を検討することが目的である。介護者の怒りと抑うつに対して、要介護者の重症度、介護者の基本属性、介護環境（介護期間、介護程度、身体的困難、自由時間、介護サービス、人生の困難）および介護負担がどのように関わっているかについて検証する。

【方法】対象は、A病院に通院しているアルツハイマー型認知症の要介護者 31 名と付添の家族介護者（主介護者）31 名。手続は、要介護者には、面接による MMSE（認知症のスクリーニングテスト）の検査、介護者には、日常生活調査（基本属性、介護環境など）、Zarit 介護負担尺度、GDS 抑うつ尺度、STAXI（怒り尺度）の調査を実施。

【調査結果】MMSE の重症度は介護負担、抑うつ、怒りとの間に有意な相関がみられず、先行研究（大西他, 2003）と同じ結果であった。また、介護者の介護負担は介護期間と有意な相関がみられ、介

護期間が長期になれば介護負担が高くなるという先行研究（大西他, 2003）と一致していた。そして、重回帰分析の結果、介護負担は介護環境の影響を受けていたが、抑うつおよび怒りは、介護環境の影響を受けていないことがわかった。さらに、高齢介護者（65 歳以上）における、男女差について、ノンパラメトリック検定を試みた結果、高齢の女性介護者は抑うつ傾向および怒りの感情が男性介護者よりも高いことが明らかになった。また、介護者の怒りの高い群と低い群において、分散分析を試みた結果、怒りの高い介護者は抑うつ傾向も高く、介護負担も高いことがわかった。そして、家族介護者は抑うつ傾向にある人が 51.6%みられ、先行研究（Arai.Y, kumamoto.K, 2004）における、抑うつ状態（50%前後）と同様であった。

【考察】今回の調査では、介護者の抑うつと怒りと介護負担には、おのおの有意な相関があることがわかった。また、抑うつと怒りには強い正の相関がみられた。そこで、抑うつと怒りには個人の「認知」という要素が存在すると推測した。今後は、Novaco(1978) の「認知的評価」と「認知的解釈」を組み込んだ怒りの生起モデルなどを取り入れた、介護負担の軽減にむけた、心理的介入への理論を検証することが必要と考えられた。

引用文献

- 荒井由美子他 (2001). 介護保険制度は痴呆性高齢者を介護する家族の負担を軽減したか 老年精神医学雑誌.
- 大西丈二他 (2003). 痴呆の行動・心理症状 (BPSD) および介護環境に与える影響 老年精神医学雑誌.